Title	ナヤール考
Author	山根, 常男
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 15 巻, p.183-194.
Issue Date	1968-02
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

ナ　ヤ　ー　ル　考

山　根　常　男

On the Nayar

By Tsuneo Yamane

序（Introduction）

ナヤール族（The Nayar, the Nair）とは，インドの南西部マラバール海岸のケララ州に住む一つのカースト（caste）である。インドの家族は，全体としては，伝統的に父権的（patriarchal），父系的（patrilineal），かつ父居的（patrilocal）であるのを特徴としているが，このナヤール族（以下たんにナヤールという）は，アッサム地方のカーシ族（the Khasi）とともに母系的（matrilineal）であることで有名である。

ナヤールにおいては，この一世紀間に，社会変動に対する適応の過程のなかで，その伝統的な親族組織の形態はほとんど消滅し，現在では西欧的な核家族の形態が徐々に支配的となりつつある。しかしナヤールは，過去においては，現在の核家族を念頭におく者にとってはとうてい考えられない異常な親族集団を形成していた。ゆえにナヤールは早くから主として人類学者によって注目され，今までにインドおよび欧米の学者たちによって数多くの報告がなされてきている。そうしてこれらの学者たちの関心が，現在は消滅してしまっている過去の親族組織に集中されてきたのは当然である。

リントン（R. Linton）は1936年に有名な「人間の研究—序論」(The Study of Man: An Introduction)を出版したが，かれはそのなかでナヤールのことにふれている。かれはそこで，ナヤールでは性的欲求の充足が家族という単位の機能からまったく除外されていると指摘して，のちにマードック（G.P. Murdock）によって概念化された核家族がナヤールには存在しないということを暗にほのめかした。このリントンの書物が出てから十数年後の1949年にマードックは問題の書(Social Structure）を出版し，核家族の概念の明確化を企図するとともに，その普遍性を強調したが，そのなかでかれはリントンのナヤール・ケースにもとづく核家族否定の見解を批判した。その後，この核家族普遍性に関するマードックの仮説は家族研究者の間に少なからぬ反響をよび起し，それを支持する者とそれに疑問を投げかける者とが現われ，家族研究における争点の一つとなったが，マードックが提起したこの「核家族は普遍的か否か」という問題に対して，リントンはすでに十数年前に一つの解答を与えていたことになるわけである。しかもこのナヤールこそかれの解答の基礎となった証拠だったのである。

ナヤールの過去の親族組織は，以上の理由から，家族社会学の基本的な問題の検討において重要な意味をもっている。そのゆえにこそ，このすでに死滅したナヤールの慣行に関する調査研究は，いま

なおかなりな関心をもって行なわれているのである。最近の研究でとくに有名なのはグー（E. Kathleen Gough）のそれであって，かの女はイギリスの統治がはじまった1792年以前のナヤールの親族組織の形態を，1947年から約2ケ年にわたって現地調査した。またごく最近の調査研究としてはメンチャー（Joan P. Mencher）のそれがある。かの女は1958年から約1ケ年半と1962年の後半にマラバールにおいて現地調査を実施した。グーがナヤールの過去の親族集団のみに関心を集中したのに対し，メンチャーはかれらの母系親族の過去の形態を調査するとともに，現在の結婚，家族の形態をも調査し，その変動過程を明らかにせんとしている。

社会（Society）

インド社会をもっとも極端に特徴づけるものは厳格なカースト制度である。したがってケララ州の人口もまた例外なく，上層から下層へと厳格に区別されるハイラーキカルなカーストによって分断されていた。ナヤールはそのケララ州における数多くのカーストのうちの一つである。ケララ州ではナヤールより上層にはナンブディリ・ブラーマン（Namboodiri Brahmins）を筆頭に，順次に，クシャトリヤ（Kshatriyas），アンバラバシス（Ambalavasis），サマンタン（Samantans）のカーストがあり，またナヤールより下層には，職人，農夫，漁夫などをふくむ賤民カーストがあって，それはいくつかのカーストに分れていた。これらナヤールの上下にある各層のカーストは，各々それ自体の内部においていくつかのサブ・カーストに分れており，ケララ社会全体はひじように複雑な社会構造を形成していた。

ところでナヤールも，それ自体，多くのサブ・カーストに分れていたが，大別するとそれは主として軍事に従事する上層サブ・カースト，つぎに寺院の仕事や，銅細工，土器製造などに従事する中層サブ・カースト，さらに洗濯，理髪，油商など他のナヤールのために奉仕する下層サブ・カーストの三つに区分することができた。しかしこのうち中層および下層のサブ・カーストは数において少なく，ナヤールの大きな割合をしめるのは，上層サブ・カーストであった。したがって従来，その異常な親族集団のゆえに学者の注目と関心を集めてきたのは，この上層サブ・カーストのナヤールであった。

ケララ州におけるこれらのカーストは，その親族組織において，すべてが母系的であったわけではない。たとえば最上層のカーストであるナンブディリ・ブラーマンは父系であったが，クシャトリヤは母系であり，そうしてまたアンバラバシスになると，そのあるサブ・カーストは母系であったが，他のサブ・カーストは父系であった。しかしナヤールの親族組織はすべて母系であり，女の先祖から出た子孫が，男も女もいっしよに住んで一つの母系集団（matrilineage）を形成していた。

現在ケララ州にナヤールの人口がどれだけあるかを決定することは困難である。なぜなら現在のセンサスはカーストによる分類をしていないからである。しかし推定によると，現在のケララ州人口中ナヤールは15パーセント，約250万人位だろうということである。

地域社会（Community）

グーによると，1つの村，あるいは隣接する2つの村のナヤールは，近隣グループを形成しており，その近隣グループ全体はエナングー（enangu）とよばれた。このエナングーは大体6つないし10の母系集団から構成されていた。1つの母系集団はエナングー内の2つないし3つの他の母系集団と伝統的に，儀式を共にすることで結びついていた。ところでこの結びつきは排他的なものではなかったので，エナングー内のすべての母系集団はあたかもくさりのようにつながっていた。

ある母系集団にとってつながりをもつ他の母系集団はエナンガール（enangar）とよばれた。ある母系集団でそのメンバーに関する冠婚葬祭の行事が行なわれるときには，そのエナンガールに属する集団から少なくとも一人づつの男女を招待しなければならなかった。このようにエナンガールは儀式上重要な意味をもち，とくに後述する少女の前青春期儀式（prepuberty ceremony）においてもっとも重要な役割を果すことになるが，エナンガールは同時にまた地域社会の社会的統制という面でも大きな役割を演じた。たとえばあるメンバーがカーストの宗教的法規に違反した場合，そのメンバーの属する集団のエナンガールはその違反者を出した集団との関係を絶縁し，違反者の裁きとそれに対する懲罰に関して，エナングーの集会を招集することを義務づけられていた。かくして，グーのいうように，エナンガールは違反者を出した集団に対して，エナングー全体を代表するものであり，同時にまたエナングー全体の道徳の擁護者でもあった。

世帯（Household）

ナヤールにおいて家族集団を認定（identify）することは容易なことではなく，それだけにまた議論の多い問題でもある。しかしナヤールにおいても世帯を認定することは比較的容易である。ところで私はここで世帯という用語を，個人に対して常時，就寝場所（shelter）と食物（food）をあたえる経済的な消費生活の単位と規定することにしたい。この意味でのナヤールにおける世帯は，タラバード（taravad）とよばれたものに相当するということができるだろう。タラバードは母系的な親族集団によって構成されていた。典型的にいうと，それはある女を中心にした場合，女の兄弟と姉妹，女の子，娘の子，孫娘の子，女の姉妹の子孫，死んだ女系祖先の親類などからなっていた。これが完全な母系集団を形成していることは，この構成員のなかの各女性の配偶者が一人としてこの集団のなかにふくまれていないことに，もっとも明りように現われている。

これらの女系の祖先から出ている男女の親族は，一つの大きな家屋のなかにいっしよに住み，それは土や石の高いへいをめぐらした広い屋敷内と菜園をもっていた。タラバードには一つの台所があって，通常，女のメンバーが共同で料理をしたが，裕福なタラバードでは，同等もしくはより上層のサブ・カーストの男が召使として料理をするためにやとわれた。ナヤールの女は育児，裁縫，料理などの家事に専念したが，ナヤールの男は村のギムナジウムで職業軍人として訓練をうけ，毎年ある期間は，隣国との戦争や首府での兵役のために村を留守にするのが常であった。したがって常時タラバードの屋敷内にいるのは，タラバードの長であるカーラナバン（Karanavan）と女子供だけであっ

た。

タラバードは，それ自体，一つの財産所有の単位であった。そうしてそれは法的にこの親族集団の最年長の男，すなわち，カーラナバンによって管理されていた。タラバードの財産は原則として，また往時は実際にも，分割するということはできなかった。グーは以上の意味からタラバードのことを財産集団（property-group）とよんでいる。ナヤールにおけるタラバードは，かくして，経済的にはその内部で共産的分配が行なわれている経済的単位集団であるとともに，親族的には女系祖先の男女の子孫からなる母系集団であり，しかもまた社会的にはこれらの男女のメンバーが寝食を共にする世帯であったわけである。

配偶（Mating）

既述のごとくナヤールの完全な母系集団は，その女性メンバーの配偶者が一人としてその集団内にふくまれていないことに，もっとも端的にしめされている。しかしもし女に配偶者がなかったならば，この母系集団は，(1)インセスト的内婚（incestuous endogamy）によるか，(2)外婚的乱交（exogamous promiscuity）によるか，いずれかによらなければ，子孫の増殖はできず，したがって集団としての存続も不可能である。

ところでナヤールの場合，タラバードが，(1)，すなわち，インセスト的内婚の集団でないことは確かである。タラバードは明らかに外婚的集団であって，その集団内ではインセストに対してきわめて敏感であり，それはきびしく忌避されるのである。このことは後の叙述によって明らかとなるであろう。それならばナヤールでは，(2)，すなわち，外婚的乱交が行なわれていたのであろうか？　これに対する解答は爾後の叙述によってあたえられるであろう。

タラバードでは数年に一回，かならずそのタラバード内の思春期前のすべての少女に対して，ある種の儀式が行なわれた。この前青春期儀式はターリケットゥ・カリヤーナム(Talikettu Kalyanam)とよばれ，その日には上層のカーストないしサブ・カースト，あるいはエナンガールの集団から，あらかじめエナングーの集会で各少女の相手としてえらばれた男子がまねかれた。この儀式の最高頂において，これらの男子はそれぞれ相手の少女の首にターリ（葉の形をした金のペンダントのついたくさり）を結いつけた。ターリ結いの儀式がすむと各カップルは3日間，屋敷内のある部屋に隔離された。この隔離の期間が終ると，各カップルは儀式的な入浴を行なって同棲の汚れを潔斎し，地域によっては，カップルは公衆の前で少女が同棲中に着ていた腰巻を2つにさいた。そうしてこのターリ結いの儀式によって結ばれた男女の間には，その後，ほとんどなんらの実質的な関係も生じないのが通常だった。

多くの報告者はこのカップルを儀式上の新郎新婦と解釈している。グーによれば，この儀式の隔離期間中に，もし少女が青春期にほとんど達している場合には，カップルの間で性交が行なわれるのが往時の一般的慣行であり，また腰巻をさく儀式は離婚の象徴であったという。この不思議な儀式が一体なにを意味するか，それは単に少女の成人式を象徴するものか，あるいは正式な結婚を象徴するものかは，今なお議論の分れる所である。

しかしターリ儀式はそれがなにを象徴するかは別として，ナヤールの女性の生涯にとってひじように大きな意味をもっていたことは，(1)ターリ儀式にまつわる種々の社会的統制，および，(2)ターリ儀式によって生ずる女性の地位の変化によって明らかである。

ターリ儀式を終って青春期に達したナヤールの女性は，その属する母系集団外の男と公然たる複数の情人関係に入ることを許された。この関係は総じてサンバンダーム (Sambandham) とよばれる。男たちは夜，夕食後に女を訪問し，翌朝の朝食前に帰った。一人の女に通う複数の男たちの間には，訪問日に関して協定が成立していた。ナヤールの女性が何人の男とサンバンダームの関係をもったかはかならずしも明らかではないが，16世紀および17世紀の著書にると，通常3人ないし8人の訪問者をもっていたとグーはいっている。

ところでこのサンバンダームの関係はすべてタラバードのカーラナバンによって承認されたものでなければならなかった。そうしてこのサンバンダームの関係のきわめて重要な特徴は，男が多くの場合エナングーの集団の者か，あるいはより上層のサブ・カーストおよびナンブディリ・ブラーマンの者かであって，より下層のサブ・カーストや非ナヤール・カーストの者とサンバンダームの関係に入ること，すなわち hypogamy はきびしく禁止されていたことである。これらの男は自らの系譜集団に所属し，夜に女を訪問するだけであった。かれらは女に対して性的パートナーとしての役割をもつ以外は，女やその間にできた子供に対して，扶養の義務も，育児，社会化の義務ももたなかった。この関係におけるかれらの唯一の義務は然るべきときに女に対して贈物をすることぐらいにすぎなかった。そうしてこの贈物をしないことは，サンバンダームの関係の終焉を意味した。そこには離別に関してなんらの正式な手続きもなかった。

嫡出制 (Legitimacy)

ナヤールでは子供は母親とともに住み，育てられるが，これらの子供に対する父性の認知はどうなっていただろうか？　この点で重要なことは，ナヤールでは女が妊娠すると，サンバンダームの関係にある男たちのうち誰か (しかもそれは必ずしも一人とは限らない) が，父性を認知することが必要だったということである。このために男は女が出産するときに，分娩料を支払うことになっていた。しかしもし適当なサブ・カーストの男が誰も父性を認知しようとしないとき，すなわち誰も分娩料を支払うものがないとき，女はタラバードから追放されねばならなかった。ところで複数の男が女のもとに通うという状況の下では，誰が生物学的父親 (biological father) であるかということはしばしば不明りようであった。結局，父性を決定するものは真に生物学的父親であるかどうかということよりは，むしろ分娩料を支払う意志である。しかも生物学的父親であることがかなりはっきり分っているときでも，かれは分娩料を支払いさえすれば，それ以上に子供に対していかなる経済的，社会的，法的な権利も義務もなかった。

さて以上のナヤールにおける嫡出制の原理をみると，いくつかの顕著な特徴があげられる。すなわち，(1)父性の認知はタラバードにとって不可欠の要件である。(2)父性の認知が得られないことは，女にとってタラバードからの追放を意味する。(3)父性の認知は生物学的父性とは必ずしも関係づけられ

ない。(4)父性の認知は父性的役割の付与とはなんらの関係もない。以上である。この4つの特徴のうち，(1)と(2)は嫡出制の社会的性格をしめし，(3)と(4)は嫡出制の家族的性格をしめしている。そうしてナヤールにおける嫡出制は(3)と(4)によって，きわめて薄弱な家族的性格をしかもたないのに対して，(1)と(2)から，それがきわめて強い社会的性格をもっていたことがわかる。

つまりナヤールの嫡出制は父を母子に法的に結びつけることによって，父一母一子の結合を保証するという核家族的境界維持のためのものではなく，むしろ女の所属する母系集団，すなわち，タラバードの社会的地位を維持するためのものであったことを意味している。そうしてナヤールの嫡出制がこのようにタラバードの社会的地位の維持と大いに関係していることは，ナヤールの配偶者選択における hypergamy の慣行によっていっそう強調されているということができる。すなわちナヤールにおける父性の認知は，同等もしくは上層のサブ・カーストないしカーストによる認知でなければならない。hypergamy の状況の下では下層のサブ・カーストの男とのサンバンダーム関係は事実上生ずる余地はないだろうし，またかりに下層のサブ・カーストの男による認知の意志表示があったとすれば，それは女と子の破滅を意味することになったであろう。父性の認知は，結局，子供がその系譜集団とカーストのメンバーになることを保証するものであった。そうして認知する父親が上層のものであれば，子供はその資質を受継ぐことによって，タラバードの威信をそれだけ高めると信ぜられていたのである。以上の分析は嫡出制が核家族よりはむしろ他の親族集団のために存する場合があることをしめしている。

内部関係 (Internal Relationships)

タラバードの内部の人間関係は，性と年令による分離とハイラーキーに基礎づけられていた。

男女は青春期をすぎると厳格に分離された。とくに女は青春期に達すると，屋敷内で男たちと離れた所にある部屋をあてがわれた。かの女がサンバンダームの男と夜をすごしたのはこの部屋だったのである。タラバード内の男女がたがいに異性の部屋に入ることは許されなかった。男はタラバードの年とった女性に対しては直接に話しかけることもできた。しかし初潮後の若い女性に対しては，命令することはあっても，自由に話しをすることは許されなかった。タラバードでの食事はまず最初に男たち，つぎに子供たちがし，女たちは最後であった。女はタラバードの年長の男のメンバーとは，食事の給仕をするとき以外，直接の接触はほとんどなかった。タラバードの男女も子供時代には，兄弟姉妹の関係は親密だった。しかしその関係は決して平等ではなく，妹は兄に服従することが要求され，また姉と弟との関係は母と子のそれに類似していた。

タラバードでは，以上の如く，性別の面で明確な分離と差別があったが，年令の面でも同様であった。カーラナバンはつねにこの母系集団の最年長者がなり，それは年令順に受継がれた。かれは年下の者に対して完全な権威をもち，すべてのメンバーにとってつねに畏敬と恐怖の的であった。たとえばメンバーはカーラナバンの前では坐ることも，また，必要な場合以外，話しかけることもできなかった。タラバードにおける年長者と年少者との関係は，このカーラナバンと他のすべてのメンバーの関係に準じ，年長者は年少者に対して命令をし，懲罰を与え，批判をする権利が与えられていた。タ

ラバードにおけるこのような年令序列制はとくに男性に対して強く要求され，女性の場合はそれほどでもなかったが，メンチャーはこれをナヤールにおける軍隊規律の反映ではないかとみている。

以上のごとくタラバードにおいては，カーラナバンはいわば王であった。ゆえにタラバードの男にとって姉妹をもつこと，とくに多くの甥と姪の双方を生む姉妹をもつことが重要であった。なぜならカーラナバンの権威と地位は，かれ自身の甥姪がおれば，それだけ向上するからであった。そうして実際にカーラナバンにとっては，より遠縁の甥よりは，自分自身の甥の方がはるかに頼りになるのが通常であった。タラバードでは最年長の女性は他の女性に対して支配力をもち，とくに若い女性の素行に対して責任があると考えられていた。しかしタラバード内では，いわゆる財布の紐をにぎっているのはカーラナバンであったゆえに，かの女の力も結局は限られたものであった。かの女がカーラナバンの姉もしくは母であるときは，間接的にかれに影響を与えることもできたであろうが，最後の断を下すのはやはりカーラナバンであった。

社会化（Socialization）

タラバードにおける子供の養育には，子供の祖母，おばなどタラバード内のすべての女性がヘルプしたが，その主たる責任はもちろん母親にあった。したがってタラバードのメンバーにとっては，男にしろ女にしろ，母親との情緒的結合はもっとも強いものであった。しかしこの母子関係も娘と息子とではニュアンスが異なっていた。娘は青春期以後も屋敷内でずっと母親といっしよに住むことになるゆえ，母—娘の関係は母—息子の関係よりもいっそう親密であり，また娘は母親に対して息子よりもより依存的であることが期待された。しかし息子は成人するとタラバードを留守にし，またサンバンダーム関係を結ぶゆえに，母—息子の関係はよりデリケートなものであった。母親にとって息子に対する最大の希望は「よい息子」になることであったが，これは「自分をいつまでも大切に思ってくれる息子」を意味していた。したがって息子が母親よりもかれの配偶者や子供により大なる関心と愛情をしめしたとすれば，それは母親にとっては大きな不面目であると考えられた。

既述の厳格な年令序列制から察せられるように，ナヤールでは，従順で，物静かで，自己よりも自己の所属する集団のために尽すのが理想的人格とされていたが，ナヤールの子供の社会化におけるこうした人格への方向づけに関しては，タラバードのすべての大人に責任があり，かれらはすべての子供たちのインフォーマルな教師であることが期待されていた。そうして子供の育児や社会化に対するフォーマルな責任はカーラナバンにあった。したがって子供を認知した父親は，生物学的父親にしろそうでないにしろ，自分の子供の育児，社会化に関してはなんらの責任もなかった。そうしてかれが責任をもっていたのは，かれ自身の所属する母系集団におけるかれの甥や姪に対するインフォーマルな教師としてのそれであった。

論考（Discussion）

A．私はナヤールの親族集団に「家族」という用語を適用することを意識的にさけてきたが，これはナヤールにはたして家族と称しうる集団があるかどうか疑問だったからである。

我々の社会では，親族体系の文脈において主位境界を形成するものは「家族」である。家族は世帯(household) であり，準拠集団 (reference group) であり，第一次集団 (primary group) である。家族は世帯として財産，消費の単位をなし，第一次集団として子供の社会化の機能を果し，また準拠集団としてホームの機能を果している。ところで我々の社会で家族がもつ親族的境界と社会的機能を，ナヤールではいかなる集団がもっているであろうか？　それはタラバードである。ゆえに問題は，(1)タラバード全体を家族と称しうるかどうか？　あるいは，(2)タラバード内部に家族と称しうるような境界をもった下位集団が存在するかどうかということである。

ここでタラバードの集団的特徴を要約してみよう。

1.　タラバードはナヤールの親族体系の文脈において主位境界を形成する完全な母系集団である。タラバードは外婚的集団で，その内部にはきびしいインセスト・タブーが存する。したがってタラバードのメンバーは，男にしろ女にしろ，配偶者を外にもとめなければならぬ。しかし，名目的にも実質的にも，それによってメンバーがタラバードの所属を離れることもないし，逆にまた配偶者をタラバードの所属に入れることもない。ゆえにタラバードはメンバーの父系的親族をいっさいふくまない。タラバードはこのことによって一つの明確な境界をもっている。つぎにタラバードには親密な母子関係と同胞関係がある。この直系的（lineal）および傍系的（collateral）な関係を中心軸としておじ—甥姪関係，おば—甥姪関係，いとこ関係，祖母—孫関係等々がひろがっている。同胞関係は母子関係を前提とするがゆえに，タラバードは，結局，母子集団を核として，女系の側においてのみ直系的，傍系的にひろがる系譜集団 (descent group) だということができる。ところでこの直系的，傍系的ひろがりは無限である。ゆえにタラバードは母系集団としては，少なくとも理論的には，境界は存しない。しかし，実質的には，親族員の死が現実の集団に境界を与えている。

2.　タラバードはナヤールにおいて世帯を形成している。このことはタラバードが原則として不可分の財産単位であること，およびメンバーにとっての衣食住の消費生活単位であることによって明らかである。

3.　タラバードはナヤールの人々にとってもっとも基本的な準拠集団である。かれらはタラバードのなかで生れ，タラバードのなかで死ぬ。かれらは男も女もその一生において，タラバードの所属を変えることはないし，また他のタラバードに重複して所属することもない。タラバードの内部は厳格な性的分離と年令序列によって基礎づけられ，その最高権威はカーラナバンに存する。カーラナバンは最年長の男子がなり，その地位はタラバード内の男子によって年令順に継承されてゆく。ゆえにタラバードは母系的ではあるが母権的（matriarchal）ではない。タラバードは一つの全体として種々の面で機能する。タラバード内の祖母から出た直系的な親族集団はタバリ (tavari) といわれ，それは情緒的にタラバードの潜在的な下位集団を形成している。タバリはのちにタラバードが社会変動の過程のなかで分解してゆくときの単位となるが，タラバードが伝統的な強固さを維持しているかぎりは，タラバード内で特殊な機能を果してはいない。

4.　タラバードは第一次集団として子供の社会化の機関である。子供はタラバード内で生れ，そこで養育され，教育される。育児の主たる責任は母親にあるが，祖母，おばなどタラバード内のすべて

の女が育児をヘルプする。子供のしつけ，教育にはすべての大人がインフォーマルな教師としての役割を演ずるが，そのフォーマルな責任はカーラナバンに存する。父親は，生物学的父親であると否とにかかわらず，自分の子供の育児，教育にはなんらの責任もない。かれが責任をもつのは自らが所属するタラバードのかれの姉妹の子供たちである。

以上の叙述から明らかなごとく，タラバード内では，女の場合，母としての地位はあるが，妻としての地位はない。また男の場合には，女のタラバード内においても，自己のタラバード内においても夫としての地位もなければ，父としての地位もない。結局，ナヤールの男女がもつ夫婦の役割は，ほとんど性的パートナーとしての役割のみに限られている。ゆえにタラバードには親族核単位(nuclear unit of kinship) としての核家族は構造的にも機能的にも存在しない。したがってまたタラバードは核家族の複合形態としての複婚家族でもなければ，拡大家族でもない。タラバードにおける親族核単位は，むしろ母子集団であり，タラバードは母子集団の複合形態であるというべきである。

もっともナヤールにおいても，父性の認知ということが制度的要件（institutional prerequisite）であることは確かである。しかしナヤールにおける父性の認知はすでにのべたごとく，核家族の構造維持のためのものではなく，タラバードの地位維持のためのものである。つまりその父性の認知は，父親に役割を付与するものではなく，むしろ母と子にその地位を確保させるものである。母と子が同等もしくは上層のカーストの父をもつことによって，タラバード自身がその地位を維持できるのである。

以上の叙述は，タラバードに家族があるか否かの問題が，結局は，親族体系としての家族の最小境界を母子集団とみるか，核家族とみるかによって決定されるということをしめしている。

B．私は家族という用語をさけたように，ナヤールのサンバンダーム関係の説明に「結婚」という用語をさけ，その代りに「配偶」という用語を使用してきた。これはサンバンダーム関係をはたして結婚と規定しうるかどうか疑問だったからである。この点，配偶という用語ならばいちおう無難であるだろう。なぜなら結婚は配偶を前提とするが，配偶はかならずしも結婚を前提としないからである。

もし結婚が男女の性的結合と経済的協力の2つを前提要件とするというマードックの規定にしたがうとすれば，ナヤールのサンバンダーム関係は明らかに結婚の枠外に出るものである。しかしマードックのこの規定はキブツのケースにもとづくスピロ（M. E. Spiro）の批判にもみられるように，疑問の余地がある。

私はいまここで結婚の概念を規定しようと思わない。しかしナヤールのサンバンダーム・システムを解釈するには，結婚の概念規定に関するもっとも基本的な問題にどうしてもふれざるをえないだろう。もし，(1)結婚をたんなる一つの性的制度，すなわち，男女の性的関係を規制するなんらかの社会的制度であると解するならば，結婚に相対立する概念は性的関係に関する社会的無規制の状態，すなわち，乱交であるだろう。しかしもし，(2)結婚をたんなる性的制度以上のもの，すなわち，なんらかの家族的な権利と義務を伴うものであると解するならば，結婚は家族とともにあり，家族を基礎としない性的関係はすべて結婚の枠外のものとなるだろう。かって一世代以上前にウェスターマークはそ

の著「人類婚姻史」のなかで，結婚と家族とはたがいに密接に関係しあっているが，重要なことは家族が結婚を基礎としているよりは，むしろ結婚が家族を基礎としていることであると断言している。このウェスターマークの見解は，(2)の立場をもっとも明確に表明したものである。ただここで注意すべきことは，(2)の規定は(1)の規定を前提としているということである。したがって，(1)は結婚のより一般的かつ基礎的な規定であり，(2)は結婚をより限定した規定であるということができよう。

もし家族を核家族，または核家族を構造的基礎とする親族集団と規定するならば，核家族を欠如するナヤールには家族は存在しないということになる。したがって結婚が家族を基礎とするという(2)の規定にしたがうかぎり，サンバンダーム・システムは結婚ではないということになる。それならば，結婚と家族のと必然的結びつきを問題視せず，結婚を単なる一つの性的制度とみなす(1)の規定にしたがった場合，サンバンダーム・システムはどのように解さるべきであろうか？

社会の性的統制の所産としての(1)の規定による結婚のもっとも基本的な条件は，おそらく，(a)配偶関係の制限，(b)配偶関係の持続性，および，(c)配偶関係の社会的是認の3つであるということができよう。ナヤールにおける配偶関係には，きわめて厳格なインセスト・タブー，エンドガミー，および女性にとってのハイパーガミーが存在する。これはナヤールにおいて配偶関係を制限するという(a)の要件がみたされていることをしめすものである。つぎにサンバンダーム関係は複数的であり，また比較的に離別は容易ではあるが，その関係は固定化しており，またそれが期待されていることには間違いない。したがって(b)の要件もまたみたされているわけである。そうして最後に，サンバンダーム・システムにおいては，女にとって性的パートナーはカーラナバンの承認を前提としなければならない。このことはナヤールにおける複数的な配偶関係が社会的是認にもとづいていること，つまり(c)の要件をみたしていることをしめしている。つまりサンバンダーム関係は持続的な配偶関係であり，しかもそれに入るには，特定の制限と社会的是認が必要なわけである。この点においてサンバンダーム関係は乱交ではない。むしろそれは結婚の最低限の，したがってもっとも基礎的な要件をみたしているといいうるのである。

つぎにそれならサンバンダーム関係はいかなる結婚形態であろうか？　サンバンダーム関係は，女の側からみて明らかに一妻多夫的（polyandrous）である。しかし一方，ナヤールでは，男の側からみてもサンバンダーム関係に入る女は一人に限られていない。ゆえにナヤールの男は一夫多妻的（polygynous）である。したがってナヤールにおける配偶関係は一夫多妻と一妻多夫の結合という意味で集団婚（group marriage）といえるかもしれない。しかしサンバンダーム関係において，一人の女に通う複数の男同士は相互に認知しあい，女への訪問に関して一種の協定を成立させているが，かれらは女たちに対するサンバンダームの配偶者としての集団を形成しているわけではない。しかもまた男たちが複数のサンバンダーム関係をもつ女たちの間には，接触はほとんど皆無である。さらにまたサンバンダーム関係にある男たちは女たちを共通にしているわけではなく，逆にまた女たちも男たちを共通にしているわけでもない。ゆえにサンバンダーム・システムは複数の男の集団と複数の女の集団との間に，外に対しては排他的に，内に対しては混合的に性関係が生ずるといった種類の形態ではない。もし集団婚が男の集団と女の集団との結婚であるとすれば，ナヤールの配偶関係は集団婚の枠

内からは外れるものである。しかし集団婚を単に一夫多妻と一妻多夫の結合と理解するならば，サンバンダーム関係は集団婚である。しかしこれは極めて特殊な形態で，強いていえば境界なき集団婚（boundless group marriage）といいうるだろう。

C．最後にナヤールに関連して結婚と家族の制度的性格および両者の関連に関する基本的な問題を要約してみよう。

(1)家族はかならず夫，妻，父，母，子，孫などといった親族的地位をもったメンバーから構成されているゆえに，家族は一つの親族体系である。(2)親族的地位をもつ者すべてが家族を構成するわけでなく，家族は親族体系中，特定の親族的地位をもったメンバーから構成された部分的な親族体系であるゆえに，家族は親族体系の下位体系である。(3)家族は親族体系の下位体系であるゆえに，家族は親族体系の文脈において構造的境界をもつ。(4)家族の最小の構造的境界を形成する親族的要素は，夫（父），妻（母），子の3つである。(5)家族の最小境界はこの3要素の4つの組合せ，すなわち，夫婦，父子，母子，父母と子のうちいずれかである。(6)夫婦の同棲のみがあって，子がそれに組入れられなければ，それは親族の基本的条件としての血縁性の否定を意味し，したがって親族体系の枠外に出るものとなる。ゆえに夫婦は家族の最小境界とはなりえない。(7)子は母から生れる。したがって母を除外して父子だけが家族を構成することは実質的に考えられない。ゆえに父子は家族の最小境界とはなりえない。ゆえに，(8)家族の最小境界は母子か，あるいは父母と子かのいずれかである。換言すれば家族の核は母子共棲か，核家族かである。

ここでナヤールに関して，つぎの命題が成立つ。(a)家族の核が核家族であるとすれば，ナヤールのタラバード内には構造的にも機能的にも核家族は存在しない。したがってまたタラバードは核家族の複合形態でもない。ゆえにナヤールには家族は存在しない。(b)家族の核が母子共棲であるとすれば，タラバードは構造的にも機能的も母子集団を基礎としている。したがってタラバードは母子集団の複合形態としての家族である。ゆえにナヤールには家族が存在する。この場合，ナヤールの家族形態は，完全母系的合同家族（perfect matrilineal joint family）と呼称しうるだろう。

つぎに結婚に関していえば，結婚の規定に，それを(1)たんなる一性的制度とみる立場と，(2)家族に基礎づけられた制度とみる立場の2つが考えられる。ゆえにナヤールに関してつぎの命題が成立つ。(a)結婚が一性的制度であるとする(1)の立場にたつならば，サンバンダーム・システムは結婚である。(b)結婚が家族に基礎づけられた制度であるという(2)の立場にたつならば，（b—1）もしナヤールに家族があるとすれば，サンバンダーム・システムは結婚ではある。しかし（b—2）もしナヤールに家族がないとすれば，サンバンダーム・システムは結婚でない。

以上のナヤールに関する考察から，つぎのごとき結婚と家族に関する基本的問題の所在がはっきりとしてくる。

結婚と家族の関係に関して，（Ⅰ）結婚は家族に基礎づけられた制度か，（Ⅱ）結婚と家族はまったく別の制度か？　また親族体系としての家族の核に関して，それは，(A)核家族であるか，(B)母子共棲であるか？　（Ⅰ）の場合，(A)とするならば，核家族を志向しない性的制度は，(1)乱婚か，(2)結婚以外の制度か？　（Ⅰ）の場合，(B)とするならば，母子共棲を志向しない性的制度は，(1)乱婚か，(2)結婚以外

の制度か？　(2)の如く結婚以外の制度とすれば，それはいかに取扱うべきか？　(Ⅱ)の立場にたつならば以上の問題はすべてなくなるが，結婚と家族の間にはいかなる関係があると考えるべきか？

ナヤールの考察は，結婚と家族に関する以上のごとき基本的問題が，嫡出制と家族に関しても存在していることを暗示している。紙数の関係から本論では，この問題をこれ以上追求することはできない。私は他の機会にこれらの問題に解答したいと思っている。